

## プロパガンディストの葛藤

### ー 드라이サー＝ディナーモフ往復書簡から

亀田 真澄

はじめに

「マルクス主義（死んだ、学校教育のようなものでなく、堇の香りのように生きた）だけが、シェイクスピアを理解するための基礎を与えてくれるのです<sup>1</sup>」。これは、スターリン時代文化政策を担う政府高官の一人であったセルゲイ・ディナーモフ（1901-1939）が、アメリカの作家セオドア・ドライサー（1871-1945）に宛てた手紙のなかで語った言葉だ。エドガー・アラン・ポーについての論文で博士号を取得したディナーモフは、1932年には30歳の若さで、中央委員会文化プロパガンダ委員会芸術部門トップの地位に就き、ソ連文化政策の舵取りを担っていた。

ソ連のプロパガンダといえば、イデオロギーに凝り固まった「堅物の」党幹部が、無垢な市民の思想や言動を徹底的にコントロールしていたとする見方がこれまで支配的だった<sup>2</sup>。それに対して、特にソ連初期に行われたプロパガンダに関しては、実はかなりの部分が失敗だったのではないかと指摘されている<sup>3</sup>し、また「上からの決定」には、これまで言われてきたような絶対的効力がなかったとする修正史観が提示されてもいる<sup>4</sup>。ここで少し立ち止まって考えてみたいのは、プロパガンダを実施する側にも逡巡や苦悩があったのではないかということだ。そこで本稿では、ディナーモフがドライサーと交わした往復書簡を読み解くことによって、ディナーモフがプロパガンダと現実とのあいだに見ていた矛盾について考えたい。ディナーモフとドライサーは、30才の年齢差やイデオロギーの違いにもかかわらず、奇妙な友情で結ばれていた（少なくとも、ディナーモフはそう信じていた）。ディナーモフのファンレターから始まった二人の往復書簡は、著者が閲覧することのできただけでも計170通に及ぶ。時期としてはディナーモフがまだ院生だった1926年から、ディナーモフ逮捕の前年に当たる1937年までの11年にわたっている（ディナーモフからドライサーに宛てたものが104通、ドライサー及びドライサーの秘書からディナーモフに宛てたものが66通<sup>5</sup>）。ディナーモフはかなりの「堅物」だったようで、ドライサーとも共産主義の評価をめぐる激しい議論をすることもあった。しかし往復書簡には、ソ連の堅物のイデオログ対プロパガンダ嫌いのアメリカ人という図式には当てはめることのできない告白や衝突があらわれている。またディナーモフはシェイクスピア研究者でもあり、特に1930年代後半の時期には特に、シェイクスピアに耽溺していったようである。本稿ではディナーモフの『オセロー』、『リア王』論も参照することによって、公的な資料にはあられ得ない、プロパガンディストの葛藤に迫りたい。

## 1. ソ連からのファンレター

ソ連の人々はほかのどの国よりも、アメリカへの憧れを強く抱いており、アメリカをすべての人々が豊かに暮らせる理想郷であるかのように思い込む「アメリカ神話」が根強かった。二十世紀初頭にはアメリカの探偵小説が人気になり、ニック・カーターやアラン・ピンカートンなどの探偵たちを主人公にして、ロシアの作家が書いた廉価の探偵小説が一大ブームとなっていた。このアメリカ探偵ものの流行が、二十世紀最初の十年間でロシアからのアメリカへの移民が急激に増加したことの要因とも考えられるほどである<sup>6</sup>。ソ連は資本主義とは袂を分かつことを決然と宣言していたが、これは「アメリカ神話」の廃絶を意味するものではなかった。共産党の機関紙『プラヴダ』は、ヘンリー・フォードの自伝を読むように促したり、ロシア人はヨーロッパ人よりもアメリカ人のほうに似ているとする記事を掲載したりと、ソ連はアメリカに倣って近代化を進めるべきだという考えをしきりに広めていた。レーニン、トロツキー、ブハーリン、スターリンをはじめとする政府高官たちも、ソ連は「プロレタリア的アメリカ」、「新しいアメリカ」になるべきだとしばしば発言していた<sup>7</sup>。

1901年にモスクワの貧しい労働者の家に生まれたセルゲイ・ディナーモフも、アメリカに魅せられたロシア人の一人だった。12才の頃からの過酷な工場労働の経験から1919年に赤軍入りしたのち、ロシア内戦終結後の1926年、現代アメリカ文学を学ぶためにロシア社会科学研究所連合大学院に入っている。ディナーモフがドライサーにファンレターを送ったのは、同年12月のことだ。ディナーモフは最初の手紙のなかで、ドライサーの「十二人の男」（1919年）、『私についての本』（1922年）、『アメリカの悲劇』（1925年）を読んで感銘を受けたとして、「私はあなたのことを、世界で最も素晴らしい作家だと思います<sup>8</sup>」と述べた。その上で、次のような質問をしている。

あなたは資本や資本主義者が好きではないですね。それでは、それらの代わりに、何がいいと思いますか？ 社会主義や共産主義ですか？ 現代の社会的立場からの救済を、どのような社会的方向性に見出していますか？ ソヴィエト・ロシアについて、どうお思いますか？<sup>9</sup>

遠いソ連の青年からの一種素朴とも思われる問いかけに、ドライサーは真正面から向き合ったようだ。二枚にわたる返信のなかで、ドライサーは上記の質問に以下のように答えている。

人間を扱うというのは、理論的なことではなくて、実践的なことです。彼の感情や、生に対する原始的な、動物的な反応というものをを変えることはできません。強欲、利己主義、虚栄心、嫌悪、感情、愛といったものは、全て少なくとも私たちに内在しているもので、それらが全て根絶やしにされるまで、ユートピアもないでしょう。【中略】とにかく、私は

ロシアでの状況について本当のところをほとんど知らないので、極端な意見を言いたくはありませんし、何か良い、大きい、長続きするようなものがロシアから生まれると願っています<sup>11</sup>。

ドライサーの答えはソ連のユートピア思想への批判とも取れるものであるが、ソ連の実情をあまり知らないとも付け加えられており、その後のやり取りにおいてはドライサーがソ連の現状についてディナーモフに質問をする事とも増えていく。また、ロシアで自身の作品が高い評価を博していると聞かされたドライサーは、『アメリカの悲劇』をモスクワで上演できないかとディナーモフに打診するなど、ソ連での人気を喜んでいたようである。

一方で、ロシア語訳が自分の知らないところで出回っていることへの不信感も募らせたドライサーは、ロシアの出版社から著作権を支払われていないことをディナーモフに相談するようになる。ディナーモフは1927年4月9日付の手紙で、自身がトップの立場に就いていた国立出版社英米部門でも『大都会の色』と欲望三部作の翻訳を出版しているものの、教育目的の出版社であり、翻訳作品に対して著作権は支払われないのが慣習であること（あるいは支払っても少額であること）、ほかの出版社は著作権を支払わないどころか、ドライサーの許可なしに作品を短縮したり勝手な編集を加えたりしていると伝えている。

そこでドライサーは、1927年4月29日付の手紙でディナーモフに、「そんな風では、ほかの国々の側で、ロシアに対して友好的な知的態度をとることができなくなってしまう<sup>12</sup>」として、ロシアの出版社に対する著作権支払い要求を代行してくれないかと頼んでいる。これに対してディナーモフは、「残念ながら私は単なる文芸評論家で出版者ではないので、個人的には国立出版社やほかの出版社の財政関係のことには関与していないことをご理解ください<sup>13</sup>」と述べているが、これはディナーモフが国立出版社の幹部の一人であったことに鑑みると不自然な言い訳にも思われる。そんななか、二人の関係は、1927年10月、ソ連政府がドライサーを十月革命十周年記念式典に招待したことによって大きく進展する。

## 2. モスクワでの対面

ソ連政府は当初、十月革命記念祝祭への公式招待客として、一週間のロシア滞在をドライサーに打診した。そこでドライサーは飢饉で苦しむ地域や小さな街での暮らしの実態を見たいと期間の延長を申し出たところ了承が下り、最終的にドライサーのソ連滞在は2ヶ月半にもわたるものとなった。とはいえ自由に動き回れることは許されず、政府から派遣された公式ガイドによる監視の目が常につきまとっていた。そんななかでディナーモフは、ドライサーのほとんど唯一とも言える、私的な友人として接していたようだ。このときディナーモフは26才で、文芸批評家として活躍する一方、ポーについての博士論文を執筆中でもあった。

ドライサーの日記には、1927年11月4日にモスクワのホテル・グランドに到着すると、

ディナーモフが待っていたと書かれている。ドライサーはモスクワ滞在中、特に金曜から週末にかけてはほとんど毎日のようにディナーモフと会っていたらしく、11月4日から25日および12月3日から8日の間に、ディナーモフとは計8日会っている。なお11月5日には、ディナーモフはアメリカ人女性で1922年よりソ連に移住していたルース・ケネル(1893-1977)をドライサーに紹介しているが、ドライサーはケネルを気に入り、ソ連での秘書に任命することとなる<sup>14</sup>。

11月13日、ディナーモフはドライサーを、工場地帯にある自宅アパートメントに招待する。それはディナーモフと母親が織物工場勤務をしていたときからの古くて小さい集合住宅だった。ディナーモフはさらに、同じアパートメントに住む労働者三人を家に呼び、ドライサーと話をさせた。労働者たちはソ連になってから暮らしが改善しており、現状に満足であるとドライサーに伝えたところ、ドライサーはソ連の共産主義について、イデオロギー的な正しさよりも、物質的に恵まれることの約束によって人々の心を掴んでいると分析する。これはのちのソ連における「楽しい生活」プロパガンダにおいて、特に顕著となる特徴だと言えるだろう<sup>15</sup>。

11月24日、ディナーモフはドライサーの国立出版局との契約のために、ドライサーの宿泊するホテルに足を運んだ。このときの様子が、ドライサーの日記では次のように述べられている。

ディナーモフとは、個人主義について、あるいはむしろ、民衆支配に対立するものとしてのインテリの特権社会について、議論になった。共産主義やその強制的な平等性とは対立するものとして、そしてそれと同じ結果を生むであろうものとして、私は国際的、博愛的資本主義を提案した。彼は同意こそしなかったが、ここロシアで行われている共産主義の困難さの全てを解決することはできなかった。私たちは疲れ切って、議論をやめた<sup>16</sup>。

ここからわかるのは、ファンレターから始まった二人の関係は、対等に議論をしあう関係に発展していたということだ。ディナーモフはドライサーのモスクワ滞在中、国立出版局との契約（未成立）、全ソ連対外文化交流協会との交渉などを代行しており、さらにドライサーのアメリカ帰国後には、ディナーモフはドライサーのエージェントになる<sup>17</sup>。

ドライサーはソ連旅行記をいくつかの媒体に発表した。そこにはまだ無名であったディナーモフも「ロシア人の友人 Russian friend」としてしばしば登場していた。ドライサーはこれらの旅行記において、ソ連を不衛生で貧しく奇妙な、しかし若い力にみなぎった国として描いている。

ロンドンから、あるいはニューヨークから来たばかりのあなたたち、資本主義的な、他の階級的観念をまだまだ強く持つあなたたちは、すべての新しさ、奇妙さ、新鮮さの中に吹き飛ばされるだろう。やれやれ！ 新しい日だぞ！ 新しい考えだ！ ファッション・ブ

レートがなんだ！ 西やら北、あるいは南が考えそうなこともなんだ！ これがロシアである。これが新しい、移行する、揺らめく、変化に富んだ、カラフルな、階級なき、新しい社会秩序の日だ。本当に新しい世界だ<sup>18</sup>。

ただしアメリカで 1929 年 10 月に大恐慌がおこると、ソ連は単なる風変わりな国ではなくなった。これまでソ連に偏見を持っていたアメリカの知識人のなかにも、ソ連の共産主義が資本主義よりも優れたシステムなのではないかと考える人々が現れた。ドライサーも 1930 年代には、ソ連寄りの言説で知られるようになっていく。またこのころにはディナーモフがソ連文化政策におけるキーパーソンの一人となっていたため、往復書簡も互いへの原稿依頼など、次第に公的な性格を増していった。ただし二人はクリスマスなどの折々にはプレゼントを贈りあう仲であったし、ディナーモフがソ連では入手の難しい雑誌や本の送付をドライサーに頼むと、ドライサーもなるべく入手しようとしていたらしい。さらにディナーモフの手紙では時として熱烈なほどに、ドライサーへの友情が語られていたし、また公的な関係ではあり得ないような衝突もあった。

### 3. 無邪気なプロパガンダ

ディナーモフとドライサーは幾度となく衝突していたが、それはほとんどがドライサーの著作料に関するもの、あるいはイデオロギー上の違いに由来するものであり、その限りにおいて、二人の関係が途切れることはなかった。例えば、1929 年 3 月 4 日付のディナーモフからの手紙では、ドライサーのユダヤ人についてのインタビューを読んだ感想が述べられているが、ディナーモフはドライサーの意見に概ね同意であるとした上で、次のように批判した。

あなたは『共産主義は独立していない』と言いましたね。資本主義はどうなのですか？ また、『共産主義』という用語を使うとき、あなたは何を意味していますか？ 私たちの国はまだ『共産主義』の例ではありませんし、いわんや『社会主義』の例にもなっていません。私たちの国は資本主義から社会主義への移行期にあるのです<sup>19</sup>。

これに対してドライサーは、ソ連政府からの人物を介して黄色い万年筆をディナーモフに送る。ドライサーの手紙には万年筆の意味について、次のように書かれている。

これは賄賂なのだよ、本当に。君が私について、もう悪いふうには言えないよう、私たちの友情に影響させるためのものなのだよ<sup>20</sup>。

この手紙に対してディナーモフは臆することなく、むしろネクタイを送ってほしいと返信しており、その後ドライサーは実際にネクタイを送っている。同年 10 月に書かれた手紙



でディナーモフは、二人の関係について次のように述べている。

本当に奇妙なのですが、あなたは私にとって、親友のようです。私たちが会ったのは数日間だけですし、話したのも数時間だけ、知り合いになって2年しか経っていませんが、これは私にとって、あなたを年上の親友と思うのに十分なのです<sup>21</sup>。

そんな二人であるが、一年以上にわたって不和が続いたこともあった。その理由については推測の域を出ないものの、プロパガンダをめぐる考え方と立場の違いがもたらしたものではないかと考えられる。

このころのソ連は、世界中の国々が恐慌の影響を受けるなか、ソ連だけが恐慌とは無関係に発展し続けており、ついにアメリカを追い越しつつあると大々的に喧伝していた<sup>22</sup>。また、これまでの労働第一主義から、生活の物質的豊かさを重視する方針へと転換を図りはじめてもいた。1931年6月にはスターリンが「彼【訳注：ソ連の労働者】は自分たちの物質的、文化的要求を保証されなければならないし、私たちには彼の要求をかなえる義務がある<sup>23</sup>」と演説したが、これは労働者が物質的な豊かさを享受することを初めて肯定した発言だった。

1931年後半にディナーモフからドライサーに送られた手紙には、この時期のソ連の熱狂ぶりを反映するかのように、五カ年計画がいかに成功しているかを証明するデータがしばしば付け加えられていた。例えば1931年11月3日にディナーモフから送られた手紙にはソ連の新聞の切り抜きが4枚同封されていたが、これらはいずれも五カ年計画のデータを示すグラフだ。その一枚は機械生産の計画数の数値と実際の生産高を比べたグラフであるが、ディナーモフはグラフの脇に英語で「現実はずっと上<sup>24</sup>」と書き加えている【図参照】。こういった部分に見て取れるのは、ディナーモフの無邪気とも言えるプロパガンダ精神だ。

ドライサーはイデオロギー宣伝を嫌悪していた。そもそもソ連行きを決めた理由も、プロパガンダで言われることではなく、実際の人々の暮らしを見たいという要望があったためであるし、イデオロギーよりも実際の人々への個別的対応による解決に重きをおいていた。そんなドライサーにとっても、ディナーモフの無邪気なイデオロギー信奉は、基本的には友人の個性のひとつにすぎなかったのかもしれない。ドライサーはしばしば、ディナーモフがいわゆる「堅物」の共産主義イデオロギー信者であ



ディナーモフからドライサーへの手紙に同封された、新聞の切り抜き（1931年11月3日付）。新聞の日付は不明。

ることをとき冗談にしており、手紙のなかで「君は元気かい、貧しい、未開のポリシェビキ君<sup>25</sup>？」などと書くこともあった。

しかし1932年、ディナーモフが党幹部の一員としてプロパガンダを実施する側になると、この「無邪気さ」にも変化が起きたようだ。同年、ドライサーは左派系の『アメリカン・スペクテイター』誌の編集に携わるようになっていた。9月、ドライサーは、『アメリカン・スペクテイター』誌の編集者としての依頼状を兼ねた手紙をディナーモフに送る。その依頼の一つ目は、スターリンが贅沢に暮らしているのではなく、警備なしで質素な生活をしているという書面を、スターリンの署名付きでもらえないかというもので、二つ目は以下のようなものだった。

もう一つには、君か、あるいは君から声をかけられる人に、短い文章を書いて欲しい。共産主義の理論や実践やそういう関係のこととか、五カ年計画がうまくいっているとかいっていないとか、何かすごい達成だとかではなく、私が欲しいのは、人間的で興味深い原稿なんだ。農民や労働者がどんな風に実際生きているのかということの小さな描写であって、共産主義のドグマはどんなかたちであっても持ち出さないで欲しい。「共産主義労働者との一日」はほとんど理想的なタイトルになるだろう。それはどんなに素晴らしい、神のような出来上りのプロパガンダよりも、もっと啓蒙的な、価値のあるものとなるはずだ<sup>26</sup>。

この手紙ののち、ドライサーは10月11日、10月20日、10月31日にもディナーモフに手紙を送っているが、いずれに手紙にも返事はなかったようで、12月7日にも、ディナーモフからの返信が長い間送られていないことをいぶかしむ手紙が送られている。ディナーモフからの返信があったのはそのあとのことなので、3ヶ月間も返事がなかったことになるが、これはこれまでの頻度からいえば異様とも言える。

12月14日付のディナーモフからの手紙には、ドライサーに対する、これまででも最も辛辣な批判が書き連ねられていた。それは基本的には『アメリカン・スペクテイター』誌第一号に掲載されたドライサーの記事についてのもので、「はっきり言わせてください。『アメリカン・スペクテイター』誌1号のなかでも、心が痛むほど最もがっかりしたのは、アメリカの危機に関するあなたの記事と、あなたの提案した解決でした<sup>27</sup>」として、ドライサーのニューディール支持を批判している。

しかしディナーモフは、ドライサーとのイデオロギーの相違はこれまでも何度ともなく経験しており、そのたびに理性的な議論を行ってきた。むしろ、3ヶ月ものあいだ返信をしなかった理由は、ドライサーがプロパガンダそのものを否定したところに求めるべきではないだろうか。

1933年前後のソ連では、これまでのようなスローガン中心の宣伝活動が「アジプロ時代の名残」という言い方で否定され、その代わりに、より生活に密着した公式文化の方向性が模索されていた。ディナーモフもこの時期には「生活と結びついて<sup>28</sup>」いるかどうか、

「生活の感覚<sup>29</sup>」があるかどうかを文学作品の評価の基準としていた。しかし当時のソ連においてリアリズムによる表象が、ゴーリキーがしばしば提唱していたように「幸福の拡大」という役割を果たすためには、楽観的に予想された「未来」におけるリアリティでなければならなかった。現時点での現実を表象しても、プロパガンダとして機能できないことは明白だったからだ。しかし、そのようなリアリズムが結局、「アジプロ時代の言い回し」となんな変わっていないということ、またその方法では読者たちには訴えるものがないということを、ドライバーの手紙は突きつけた。そしてディナーモフ自身も、ドライバーの意見を認めざるを得なかったのではないだろうか。あるいはそれこそが、一部には自身が作り上げているスターリニスト・プロパガンダに対して覚えていた違和感そのものだったのではないだろうか。

その後も二人の往復書簡は続くものの、事務的なやりとりが多く、ようやく以前のような関係に戻ったのは、1933年10月26日の手紙でディナーモフが次のように書いてからのことだ。

私はあなたと数日間をともに過ごしましたが、そのことは二度と戻らない初恋のように覚えています。あなたの考えではいつも、初恋というものは最後の恋に戻ってくるということです。しかしこの幻想は私たちの心臓が鼓動するかぎり、私たちが永遠に愛するのを助けてくれます。でもこのことは、あなたに賛同しないことを妨げません。むしろこのことは、あなたと討論するのを助けるものです。良い関係というのは、議論のための最高の土台なのですから<sup>30</sup>。

この手紙のなかでディナーモフは、「2年の間、私は彼【訳注：シェイクスピア】について、繰り返し読みながら考えていて、私の心は大きな困難とともに彼をとらえています<sup>31</sup>」と述べ、ドライバーの書斎にシェイクスピア関連の書籍で必要のないものがあったら送って欲しいと依頼している。こののち二人の往復書簡のなかで現代の問題やイデオロギーについて熱い議論が交わされることはなくなり、ディナーモフからの手紙ではそれに替わるかのように、シェイクスピアにのめり込んでいることが語られるようになる。

#### 4. 大粛清とシェイクスピア悲劇

1934年、第17回党大会においてスターリンが社会主義への到達を宣言すると、「生活は楽しくなった」というスローガンを旗印に、ソ連の人々は物質的に豊かな生活を送っているということが国内外に宣伝されるようになった。夏の夜にはカーニヴァルのお祭りが開催され、都市部では豪華なホテルやレストラン、大型デパートや高級食材店が次々に建設された。アイスクリームやハンバーガーを大量製造するための機械がアメリカから輸入され、クリミアにはソヴィエト・ハリウッドが建設されようとしていたことに顕著のように、これらの新しいソ連消費文化はアメリカ文化の「アダプテーション」としての側面が



強い<sup>32</sup>。

現代アメリカ文化の専門家であるディナーモフが、新しいソ連文化を方向付ける地位に任命されたのも、このことと密接に関係していたと考えられる。1930年代のスターリニズム文化のあり方を決めるという重要な役職に、アメリカ文化に精通する若い研究者が任命されていたということ自体が、ソ連のプロパガンダを検討する上で興味深い事実である。またディナーモフは1933年、新しく発刊された『国際文学』誌の編集長を務めることとなる。これはロシア語、フランス語、ドイツ語、英語の4カ国語で、2ヶ月に一度の頻度で発刊されていた文芸誌であるが、特に1933年のロシア語版はすべての号がアメリカ文学を特集していたほど、かなりアメリカ文学に偏った媒体だった<sup>33</sup>。ディナーモフは1934年4月16日、党機関紙『プラヴダ』に「プロットの芸術に向けて」と題する小論を発表した。これは党の新しい方針としてプロットに基づいた芸術を重視するということの宣言であり、この後、特に映画産業においてこれまでのモンタージュ主義からプロット重視へと大きな方針転換が起こった。同年8月にはディナーモフが準備段階から深く関わっていた第一回作家会議が開催され、社会主義リアリズムが唯一公認の芸術様式として提起される。

「生活は楽しくなった」キャンペーンを実施するために、党幹部たちが現代アメリカ文化に精通することが要求されていた時期、その文化政策の最先端にいたディナーモフの方とはいうと、シェイクスピア研究に没頭するようになっていく。1935年4月にはスターリンに、モスクワでのシェイクスピア国際会議の開催を提案している。ディナーモフはシェイクスピア四大悲劇の研究を一冊の著作にまとめたいと考えていたようで、1935年に『リア王』、1936年に『オセロー』についての論文を発表する<sup>34</sup>。着目したいのは、ディナーモフはシェイクスピア作品をリアリズム文学として読んでいたということだ。『リア王』論においてディナーモフは、二人の娘からの裏切りにあったリア王が、着の身着のまま嵐のなかを歩くことによって、「現実の世界を見るようになった<sup>35</sup>」という点に光を当てている。『オセロー』論では、「シェイクスピアは、多くのブルジョワ批評家たちが言ってきたこととは対照的に、リアリスト芸術家であり、彼の劇作は巨大な世界の表象である<sup>36</sup>」として、「シェイクスピア作品に秘密はない。彼はリアルな人々のリアルなふるまいを私たちに示す<sup>37</sup>」と論じている。

図式的なほどの裏切りと陰謀に満ちた『オセロー』や『リア王』を、ディナーモフが「リアリズム」と考えたことについては、当時の時代背景を思い起こさずにはいられない。ソ連では1934年12月、スターリンに代わる人気を集めていたセルゲイ・キーロフが何者かによって暗殺される<sup>38</sup>。キーロフ暗殺の犯人探しをきっかけとして「臨時立法」が制定されたが、これはテロ活動の容疑者に対して司法手続きなしの処刑を合法化したものだ。1935年には党员証点検、1936年には党员証交換キャンペーンが行われ、偉大な躍進を遂げたはずのソ連がいまだに貧しいのは、党内部に潜んでいるスパイたちが裏でサボタージュをしているせいだという無理やりな論理で、多くの命が奪われた<sup>39</sup>。

1936年7月16日付の手紙でディナーモフは、シェイクスピア研究のためにイギリスの歴史を学んでいるとして、特に12世紀のイギリスについて次のように書いている。

大変興味深い時代です。偉大さと卑しさ。華麗さと厳格さ。品格と偽善。富と貧しさ。不信と信頼。歴史は知るだけでなく感じるができるときにこそ良いものです<sup>40</sup>。

12世紀のイギリスと言えば、無政府時代と呼ばれる、王位継承権をめぐる骨肉の争いの時代だ。この時代を「感じるができる」とする部分には、ディナーモフが自身の生きている粛清の時代を重ね合わせていると考えられるだろう。この手紙の書かれた翌月には、革命期から名をはせていた大物政治家だったジノヴィエフ、カーメネフを被告とする公開裁判が行われ、二人は証拠もないままスパイの罪で銃殺刑に処された<sup>41</sup>。多くの人々は食べるものにも困るという格差社会、そしていつ誰が逮捕されるともわからない状況で過ごさなければならない毎日は、プロパガンディストとしてのディナーモフがひた隠しにしなければならぬリアリティだ。しかしディナーモフによるシェイクスピア悲劇の解釈やドライサーへの手紙には、公式の「社会主義リアリズム」で描かれる生活ではなく、裏切りと喪失こそがソ連のリアリティであるという本音を掬い上げることができるだろう。

## 結び

ディナーモフの手紙がどこまで本音を反映しているのかはわからないものの、ディナーモフは時に、ソ連では発言できそうもないことまでドライサーに書き記していたようだ。例えば、ドライサーが国立出版社のビジネスのやり方があまりにもひどいとディナーモフに書き送ると、ディナーモフは返信で「国立出版社の人間たちを知っていますよね。彼らは本当に変なのです<sup>42</sup>」とまで書いている。またディナーモフが1928年4月の手紙で、「私はここで（私の領域で）重要人物になり、つらいです。あなたは私よりもこのことを知っているでしょう<sup>43</sup>」と書いたところ、ドライサーは返信で次のように書いた。

君は大人物ですよ、セルゲイ。私の推測が間違いでなければ、君は君の政府から、重要な地位に任命されることになるでしょう。現実の重要性があるようなキャリアはどんなものでも、多かれ少なかれ犠牲です。君もすでに、少なからず苦しんできたでしょう。そして君が達成するように求められることを達成する前に、君はもっと苦しむでしょう<sup>44</sup>。

ディナーモフからの最後の手紙は、1937年6月、イヴァン・パパーニンを隊長とする調査隊がドライサーの『アメリカの悲劇』を北極へ持っていったと伝えるものだった。ドライサーはその返信で、「しかし真面目な話、それを聞いて、とても感動したんだ<sup>45</sup>」とディナーモフに書き記している。パパーニン調査隊は飛行機で北極点に降り立って氷盤上にテントを張ったのち、長期間生活しながら海水の動きや気象についてのデータを

収集するという観測を行っており、ソ連の近代化によって自然が征服されたことを示す、戦前のスターリニズム・プロパガンダの頂点ともいえるものだ<sup>46</sup>。特にプロパガンダの点で重要だったのが、彼らが北極ですら文化的な生活を営んでいるということであったが、「文化的生活」の一部としてアメリカ文学を読むということが選ばれ、さらにそのためにドライサーの作品が用いられたことには、ドライサーとディナーモフの11年にわたる友情のひとつの結実を見ることが出来るだろう。ただし北極プロパガンダとちょうど同じ時期、粛清のターゲットとして外国とのつながりの深い人物が浮上するようになり、ディナーモフも「達成するように求められることを達成する前に」、38才の若さで処刑された。

注

1. "Only Marxism (not dead and scholastic but living like the smell of violets) can give a basis for an understanding of Shakespeare." ディナーモフからドライサーへの手紙、1933 年 10 月 26 日付。ペンシルヴァニア大学所蔵。
2. Peter Kenez, *The Birth of the Propaganda State, Soviet Methods of Mass Mobilization, 1917-29*. (Cambridge: Cambridge University Press, 1985).
3. David Brandenberger, *Propaganda State in Crisis: Soviet Ideology, Indoctrination and Terror under Stalin, 1928-1941* (New Haven and London: Yale University Press, 2011).
4. 特に、マリア・ベロドゥプロフスカヤの次の著作は、映画産業における当局からの圧力は影響力の弱いものであり、映画監督の指揮に多くが任されていたということを指摘したものである。Maria Belodubrovskaya, *Not According to Plan: Filmmaking under Stalin* (Ithaca: Cornell University Press, 2017).
5. 著者が閲覧できたのは、ペンシルヴァニア大学所蔵の計 168 通、コーネル大学所蔵の計 28 通であるが、重複が 26 通あった。
6. Allan Ball, *Imagining America: Influence and Images in Twentieth-century Russia* (Oxford: Rowman & Littlefield Publishers, 2003), pp.64-70.
7. Ball, *Imagining America*, pp.30-31.
8. "I think you are the greatest writer in the world." ディナーモフからドライサーへの手紙、1926 年 12 月 10 日付。ペンシルヴァニア大学所蔵。
9. "You don't like capital or capitalists. But what do you want to have instead of them? Socialism or Communism? In what social directions do you see the salvation from the contemporary social position? What do you think about Soviet Russia?" ディナーモフからドライサーへの手紙、1926 年 12 月 10 日付。ペンシルヴァニア大学所蔵。
10. ディナーモフが最初の手紙に同封した、ドライサーについてのエッセイ（ロシア語）を、ドライサーは翻訳業者に依頼して英訳させた上で読んでいる。
11. "[...] dealing with man is a practical thing – not a theoretical one. Nothing can alter his emotions, his primitive and animal reactions to life. Greed, selfishness, vanity, hate, passion, love, are all inherent in the least of us, and until such are eradicated, there can be no Utopia. [...] In conclusion, I want to say that I know so little of the truth of the conditions in Russia I would not venture an opinions to the ultimate result, but I do hope that something fine and big and enduring does come out of it." ドライサーからディナーモフへの手紙、1927 年 1 月 5 日付。ペンシルヴァニア大学所蔵。
12. "it seems to me that this practice will in no way help to create a friendly intellectual attitude on the part of other nations toward Russia." ドライサーからディナーモフへの手紙、1927 年 4 月 29 日付。ペンシルヴァニア大学所蔵。
13. "But you must understand that I am personally not responsible for the financial dealings of the State Publishing House and other publishers because I am unfortunately only a literary critic and not a publisher." ディナーモフからドライサーへの手紙、1927 年 9 月 5 日付。ペンシルヴァニア大学所蔵。
14. ケネルはディナーモフのかつての恋人とされており、またドライサーの愛人となることでも知られている。ドライサーの「女性たちのギャラリー (A Gallery of Women, 1929)」の登場人物の一人はネケルをモデルとしているが、そのことを巡ってのちにケネルはドライサーと対立することとなる。
15. "And I gathered that they were thoroughly seized with all the doctrines of Marxism- as much as is any Catholic with the doctrines of Catholicism. Only I the case of Communism - I assumed – the doctrine worked out more to their material advantage – or promised to." Thomas P. Riggio, James L. W. West III Eds., *Dreiser's Russian Diary* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1996), p.88.
16. "I got into an argument with Dinamov about individualism, or rather intellectual aristocracy, as opposed to mass rule.

As opposed to Communism and its enforced equality I offered international, benevolent capitalism as very likely to achieve the same results. He did not agree but could not dissolve all of the difficulties of Communism as practiced here in Russia. In weariness we finally desisted." *Dreiser's Russian Diary*, p.137.

17. ドライサーは 11 月 26 日からレニングラードへ行くが、モスクワに戻った翌日には（12 月 4 日）、ディナーモフは再びドライサーのホテルを訪ねており、夜はともにメイエルホリド劇場へ行っている。また、12 月 6 日にはドライサーの帰国の手はずを整えるために、ディナーモフが全ソ連対外文化交流協会と交渉をしている。ドライサーによると、往復旅費は全ソ連対外文化交流協会から支出されるという約束だったにもかかわらず、復路の旅費はやはり出せないという知らせを受けたとのことで、ディナーモフがその対処に当たった。7 日、ディナーモフとホテルの部屋にいるときに、復路の旅費はやはり全ソ連対外文化交流協会が持つということになった（その代わり、秘書ケネルのソ連国内の旅費はドライサーが支出する）とのことで話がつく。ドライサーはその後、ニージイ・ノヴゴロド、キエフ、ハリコフをめぐり、1928 年 1 月 13 日、オデッサからパリ行きの列車に乗って帰国の途についた。
18. "And so you yourself, fresh from London, or New York, and with all your capitalistic and other class notions still strong upon you are suddenly swept into the newness, the strangeness, the freshness of it all. Heigh ho! Bully for a new day! Bully for a new idea! To hell with fashion plates, with what the west, or the north, or the south, may think! This is Russia. This is the new shifting, shimmering, changeful, colorful, classless day of a new social order. A new world indeed." Theodore Dreiser, *Dreiser Looks at Russia* (New York: Horace Liveright, 1928), P.227.
19. "You said: 'Communism isn't independence'. How about capitalism? And what do you mean when you use the term 'communism'? Our country is not as yet the example of 'communism' nor even of 'socialism' – we live in the transition period from capitalism to socialism." ディナーモフからドライサーへの手紙、1929 年 3 月 14 日付、ペンシルヴァニア大学所蔵。
20. "This is intended as a bribe - really - to affect your friendship in such a way that you will be unable to say anything unkind about me at any time." ドライサーからディナーモフへの手紙、1929 年 4 月 11 日付、ペンシルヴァニア大学所蔵。
21. "It is very strange - you are for me like the best friend. Only some days we were together, only few hours we talked, only two years we know one another - but it is quite enough for me to think about you as my good big friend." ディナーモフからドライサーへの手紙、1929 年 10 月 4 日付、ペンシルヴァニア大学所蔵。
22. 実際には、ソ連の農業集団化は農村に大飢饉をもたらしており、その犠牲者の数は五百万人にものぼると言われる。
23. «Он требует обеспечения всех своих материальных и культурных потребностей, и мы обязаны исполнить это его требование.» *Сталин И. В., Сочинения*. т. 13 (Июль 1930-Январь 1934.) М., ОГИЗ, Гос. Изд-во Полит. литературы, 1952, С.58.
24. "Reality is very much better." ディナーモフからドライサーへの手紙に同封された新聞の切り抜き、1931 年 11 月 3 日付、ペンシルヴァニア大学所蔵。
25. "How are you, you poor, benighted Bolshevik?" ドライサーからディナーモフへの手紙、1931 年 9 月 14 日付、ペンシルヴァニア大学所蔵。
26. "The other thing is this: From you or such people as you could influence, I would like some little sketches not on the theory and practice of Communism or anything relating to it, or whether the five-year plan is working or not working, nor about the completion of any great work, but what I really want is some human interest sketches, little pictures of how the farmer or the worker actually lives, but without Communist dogma being lugged in in any form whatsoever. A DAY WITH A COMMUNIST LABORER would be almost an ideal title, and would be much more illuminating and



- valuable in this paper than any God's quantity of propaganda, however brilliantly done.” ドライサーからディナーモフへの手紙、1932 年 9 月 22 日付、ペンシルヴァニア大学所蔵。
27. “Let me tell you straight, the most painful disappointment to me in the first number of “American Spectator” was your articles on the American crisis and the solution which you suggest.” ディナーモフからドライサーへの手紙、1932 年 12 月 14 日付、ペンシルヴァニア大学所蔵。
28. «связано с жизнью» (Динамов С. «Синклер Льюис, У нас это невозможно» // Динамов С. Зарубежная литература. М., Государственное издательство художественной литературы, 1960, С.406.)
29. «чувство жизни» (Динамов. «О творчестве Шервуда Андерсона» // Зарубежная литература, С.395.)
30. “I have spent few days with you, but I remember them like a first love which never return, although you always think that it has returned in the last love. But this is an illusion which helps us to love eternally as long as our hearts beat. / But all this does not prevent me from disagreeing with you, or rather it helps me to dispute with you, because good relations are the best foundation for discussion.” ディナーモフからドライサーへの手紙、1933 年 10 月 26 日付、ペンシルヴァニア大学所蔵。
31. “For two years I have been thinking about him [Shakespeare] reading and re-reading him, and my mind embraces him with great difficulty.” ディナーモフからドライサーへの手紙、1933 年 10 月 26 日付、ペンシルヴァニア大学所蔵。
32. 詳しくは、次の文献を参照。Ball, *Imagining America*.
33. 『国際文学』誌はイデオロギーにとらわれないで様々な作品を紹介することを標榜していたし、実際にこれまでソ連では全く知られていなかった作家たちの翻訳が掲載されており、『国際文学』誌での掲載をきっかけに、翻訳本が出版されるということも多かった。ウィリアム・フォークナー、ロバート・フロスト、ウィリアム・サロヤン、アーウィン・ショーなど。Deming Brown, *Soviet Attitudes toward American Writing* (Princeton: Princeton University Press, 1962), p.50.
34. 『ハムレット』についての論文はディナーモフの死後に発表されている。『マクベス』についての論文は、ディナーモフからドライサー宛の手紙（1935 年 9 月 17 日）で取り掛かりたいと書かれてはいるものの、未完成あるいは未発表のものと思われる。
35. «Но ведь именно теперь Лир увидел реальный мир» (Динамов. «Король Лир» // Зарубежная литература, С.164.)
36. «Шекспир, вопреки утверждениям многих буржуазных критиков, был художником-реалистом, и его драматургия есть образ огромного мира.» (Динамов. Характеры трагедии «Отелло» // Зарубежная литература, С.51.)
37. «У Шекспира нет тайн, он показывает нам реальные поступки реальных людей.» (Динамов. «Король Лир» // Зарубежная литература, С.105.)
38. キーロフ暗殺の犯人は今も謎で、スターリンが命じて政敵キーロフを暗殺させたという説もあれば、内務人民委員部による犯行とする説もある。
39. Sheila Fitzpatrick, *On Stalin's Team: The Years of Living Dangerously in Soviet Politics* (Princeton: Princeton University Press, 2015).
40. “Very curious epoch: Greatness and lowness. splendor and puritanism, nobleness and hypocrisy, wealth and poverty, disbelief and belief. History is only good when one not only knows it but feels it too.” ディナーモフからドライサーへの手紙、1936 年 7 月 16 日付、ペンシルヴァニア大学所蔵。
41. この大粛清において、スターリンとの近さは何も保障しなかったどころか、権力に近い人間から粛清された。中央委員会のメンバー 139 人のうち、実に 98 人が逮捕されるという、一種の下剋上のような展開を、影では喜

んでいた人も一部いたという。

42. "You know the people of Gosizdat - they are very Strange." ディナーモフからドライサーへの手紙、1928年12月12日付。ペンシルヴァニア大学所蔵。
43. "I am now very important man here (in my field) - and it is heavy. You know it more than I." ディナーモフからドライサーへの手紙、1928年4月11日に書いたものとされる。ペンシルヴァニア大学所蔵。
44. "You are a very big man, Sergey, and, unless I miss my guess, you are going to be called to some position of importance under your Government. Any career of real importance is more or less of a sacrifice. You have suffered not a little already, and before you achieve what you are probably called on to archive you will suffer a lot more. It is the only way that we learn." ドライサーからディナーモフへの手紙、1928年10月14日付、ペンシルヴァニア大学所蔵。
45. "Seriously though, I am very much moved to hear of it." ドライサーからディナーモフへの手紙、1937年6月26日付、ペンシルヴァニア大学所蔵。
46. 1937年、イヴァン・パパーニンを隊長とする四名の北極調査隊が送り込まれることとなったが、これは北極での暮らしまでが「より楽しくなった」ことを示したプロパガンダだった。1937年5月、オットー・シュミットをはじめとする北極の専門家たちとパパーニン調査隊のメンバーたちは、世界で初めて飛行機で北極点へ到達した。

## A Divided Propagandist:

### From the Correspondence between Dreiser and Dinamov

---

---

Masumi Kameda

Sergei Dinamov, head of the Culture and Propaganda Committee's Art Sector in the Soviet Union from 1932 to 1938, and a specialist of contemporary American literature, had corresponded with American writer Theodore Dreiser for eleven years. Their correspondence started in 1926, when Dinamov was still a doctoral student, and lasted until 1937, the year before Dinamov's arrest. Although Dinamov was known as a strait-laced propagandist, his letters to Dreiser indicate an understanding of the Soviet reality which contradicted what he as a propagandist promoted to Soviet citizens. Furthermore, since 1935, Dinamov began to deeply devote himself to Shakespeare. This paper attempts to salvage Dinamov's hidden dilemma not only through the close reading of the letters between Dinamov and Dreiser, but also through Dinamov's interpretation of *King Lear* and *Othello*. Thus, it offers an alternative view of a backstage of Stalinist propaganda, which would never appear from the official documents.